

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
 共立女子大学文芸学部劇芸術研究室内 文芸OGネットワーク
 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
 代表 川瀬 治子 発行 2022. 3. 20

vol. 34

新代表挨拶

文芸OGネットワーク会員の皆様、今年度書面における総会で代表となりました川瀬治子です。多田様の後任ということで、少々荷が重く感じております。

私は、昭和52年造形芸術コースを卒業しました。富永惣一先生、谷信一先生、友部直先生がいらした時期です。当時は先生のご自宅に学生が集うこともあり、講義以外でもお人柄を知る機会を持ってました。OGネットに関わるきっかけは、何とお三人の先生のお葬式（富永先生は奥様のご葬儀）でした。市川和子先生とはその都度お目にかかりました。私は市川先生の彫塑を履修していませんでしたが、その後、市川先生か

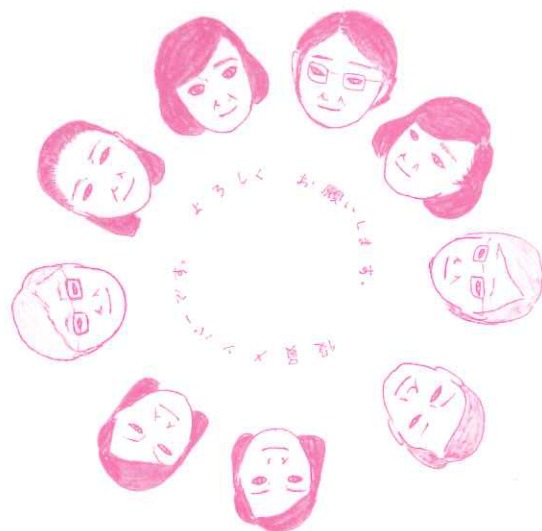
らお誘いを受けたのが発端です。残念ながら先生は、途中でお亡くなりになったのはご承知の通りです。その後、演劇資料整理に加わり今に至っています。私としては、好きな芝居の資料整理が楽しくて、毎週通っていたようなものです。それが、今回代表ということで少々戸惑っているのが正直なところなんです。

まして、昨年度から役員の皆様とも直接お会いできていない状況です（リモートでは会議をもてましたが）。これからの会の活動等を、考えていかななくてはならない大切な時期にきています。そんな時に今までのように、自由に集まり、相談できないことが不安ではあります。

これまで以上に役員はじめ会員の

皆様のお知恵、ご協力を頂きながら進めていくことになっていきますが、よろしくお願いいたします。

川瀬治子（1977卒）



報告:リモート役員会

新型コロナウイルスの感染拡大によって私たちの生活は一変した。また、新たな変異株が感染を広げており、気を緩めることができない生活が続いている。

コロナ禍以前の役員会は、年に3、4回行われていた。大学の教室に役員が集まって、総会、サロン講座、共立祭の段取り等について話し合いをしてきた。会報の編集会議、発送作業も密（みつ）になっておこなっていた。それができなくなってしまった。

昨年度は、メールだけで情報をやりとりして「話し合い」を進めた。しかし、次年度の活動を決定する必要がある。2021年3月13日に初めてリモートで役員会を開いた。テレビ会議システムZoomを使って、久しぶりに画面越しに顔を見て話し合いをすることができたのである。今年度（2021年度）も総会は開けず、会員の皆様には書面で承認していただいたが、最初の役員会（8月22日）もリモートとなった。

Zoomがつながるかどうかわからない、初回開催のときは、「予行演習」をして臨んだ。「聞こえますか」「聞こえます」「見えますか」「見えます」の応答を繰り返した。馴染みの声がかえ、いつもの顔が画面に映し出されるまで、ホ

スト役も参加者もドキドキであった。リモートのいい点は、言うまでもなく、その場所に行かなくても自宅で参加できる点である。交通費、移動時間の節約になる。ただ、インターネットの通信環境が不安定でトラブルが起こることもある。そんなトラブルには、参加メンバーのだれかに電話をかけてきくのが心強い対処法だ。初回はテレビ電話をしながら、携帯電話で話し、Zoomのチャットを使うという奇妙なやりとりになったが、何とか意思疎通はできた。

手紙、メール、電話、ファクシミリ、オンライン…これらをすべて使って役員間で連絡を取り合っている。リモート役員会は顔を見ながら話ができるので、「対面」には違いないが、会議が終われば、瞬時に画面から全員が消え、交流が途絶えてしまう。コロナ禍ではリモートで役員会を開き、OGネットワークを継続していくことになるだろう。早くコロナが収束して通常のOGネットの活動が再開されることを祈るばかりである。

小池恵己子（1981院卒）

著書紹介

トマス・チャンピオン『英詩韻律論／四声部対位法論』（入江和生訳）



本学前学長入江和生名誉教授が、インターネット書籍にシェイクスピアと同時代（16－17世紀）の詩人で作曲家トマス・チャンピオンの二つの論文を、2020年に訳出、発表された。トマス・チャンピオンは現代ではシェイクスピアという巨大な存在の蔭に隠れて、なかなか我々の目に触れる機会に恵まれないでいる。それでも、彼の論文の基である詩と音楽はYouTubeやCDなどで聴くことができる。

二つの論文は専門家かマニアでもない限り難解で、私などにはちんぷんかんぷんである。断っておくが、訳が難解なのではない。中身が難解なのである。

しかし、シェイクスピアを代表として、無韻詩へ移行していく時代に“ラテン詩の韻律を英詩に当てはめ、その上で、ラテンの韻律から抜け出し、英語本来の韻律詩を作成していった”（入江）、それも、“天賦の才能を持った詩人で作曲家”（入江）トマス・チャンピオンの作品を深く知りたい人々にとっては重要な教材となるだろう。

その詩と音楽は“過度に情緒に流れることなく、理知的で、感覚的で、そして、しばしば諧謔的であり”（入江）その作品の対象は宮廷の優美な世界から世俗の卑猥な世界まで“多種多様”（入江）に及んでいる。この時代の激動と栄光、猥雑さと

皮肉な言葉の行き交う世界にあって、彼の詩と音楽が、こんなにもやわらかで、美しい調べを持ち得たことに驚いている。今、私は彼のファンになりそうなのだ。

難解なのが好きな方は論文を、優しい世界がお好みなら、彼の論文の基礎となった詩と音楽を是非味わって頂きたい。

佐藤和代（1966卒）

翻訳はインターネットで以下のサイトより閲覧できる。

<http://www.ceres.dti.ne.jp/~ksirie/campion/>

『向田邦子文学論』（向田邦子研究会編 新典社刊、2018年）

脚本家、小説家、随筆家であった向田邦子が飛行機事故で亡くなったのは1981（昭和56）年、51歳の時。その前年に直木賞を受賞し、さらなる活躍が期待されていた時も時であった。

『向田邦子文学論』は向田の出身校実践女子専門学校（実践女子大学）の卒業生を中心として作られた「向田邦子研究会」

が、創立30周年を記念して刊行したものであり、文芸学部の半沢幹一、深津謙一郎、阿部由香子（敬称略）の先生方が寄稿されている。

この書の三分の一以上は会員による論文である。会員のほとんどは専門の研究者ではないが、向田作品の研究とは、「いわゆる文学としてのみならず、

まさに読者一人一人の生活実感と地続きであるところにこそ、意義があるのではないか」という、代表幹事である半沢幹一先生の編集意図が生かされているからなのである。

多田久恵（1970院卒）



『イタリア・宝塚・2.5次元—多彩な演劇世界をめぐる—』（鈴木国男著 春風社刊、2021年）



著者は文芸学部の鈴木国男教授。書籍タイトルのとおり、“イタリア演劇”、“宝塚歌劇”、“2.5次元ミュージカル”についての三部から成り、鈴木先生のこれまでの探求がみっちり詰まった贅沢な一冊。

「コンメディア・デッラルテ」なんて舌を噛みそうな単語を、朝霞のかかった一時限目の脳みそで必死に受け止めたことを懐かしく思い出しながら、頁をめくる。

「第2部 宝塚歌劇」の「第1章 宝塚大劇場誕生」は、天災と劇場についての考察。災害レベルと表現されるコロナ禍で本

書を読んでいた為、現状と重ねて考えずにはいられない内容であり、「アフターコロナ」の世界において劇場文化がどのように変容するのか、あれこれ想像をめぐらせてしまう。

「第3部 2.5次元ミュージカル」では、自分の「2.5次元」の理解がひどく浅かったと痛感。限定的な様式として捉えるのではなく、広く舞台芸術にかかわる重要なキーワードであることに気づかされた。また、調べてみるとあの人も？えっ、この人も!?と、テニミュ*出身という経歴を持ち、現在大人気となり活躍している多くの俳優が

いることにも驚いた。2.5次元ミュージカルと、役作りや俳優の育成についての考察も興味深い。

「趣味は観劇」と言っている人はまわりに多い。だけど鑑賞するジャンルは偏りがち、なんてことが自分も含めてあるような。イタリア・宝塚・2.5次元、さらには歌舞伎・ストレートプレイ etc. と演劇世界は多彩なはずなのに…。本書を読むと、舞台の味わい方がまた幾重にも深まるようだ。

石井藍子（2003卒）

*ミュージカル『テニスの王子さま』の通称



女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立135周年を迎えた共立女子学園。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立spiritを放っているOGを紹介していきます。

file 10 阿部沙織

Saori Abe

文芸学部での充実した学生生活を経て、卒業後は出版社へ就職、その後は、小さい頃からの夢だった「喋る仕事」FM局のパーソナリティへ転身。現在、エフエム岩手でアナウンサーとして活躍中の阿部沙織さん(2003年卒)にお話を伺いました。

—まずは、大学生活の思い出、印象に残っていることを聞かせてください。

1、2年生のうちはキャンパスが高尾で、千葉の実家から片道3時間！よくまあ休まず遅刻もせず通ったものだと思います。でもずっと学びたかった「演劇とは何か」に触れ、学び始めたら楽しくて、入学して知り合った友達にも恵まれて、あっという間の2年間でした。語学の授業では、先生のモノマネばかりしていた気がします。劇芸の先生方は大変個性的かつ魅力的な先生ばかりでした。中でも近藤瑞男先生の品のある言葉選び、鈴木国男先生の年齢不詳なところが大好きでした。鈴木先生にはご自宅にお招きいただき、手料理をふるまってもらったうえ、宝塚トークに花が咲く…という幸せな時間を頂戴したこともあります(これ書いて良いのかしら?)。先生方には本当に感謝しています。

—好きな学問と出会い、魅力的な先生方や多くのご友人と共に過ごした充実の大学生活が目につかぶようです。卒業後は、どのような道を選ばれたのですか。就活の様子についても聞かせてください。

コレ！と決めることができず、もともと興味があったマスコミ系やアルバイトで楽しさを知った接客系など、アレコレ受けました。ただアルバイトばかりしていて就活自体をスタートするのが同級生たちに比べて遅かったので、マスコミ系はほとんど見つからず…。なぜかポツンと残っていた出版社が1社あり、その会社とご縁がありました。

—出版社では、どのような仕事を？

新卒で入社し6年間、勤めました。営業に配属され、出張で全国を飛び回り、たくさんのお逢いがありました。本当に楽しい仕事だったのですが、三十路が見えてきた頃に「そういえば小さい頃からの夢だった『喋る仕事』にまだチャレンジしてないな」と思い出しました。

—夢へのチャレンジ、ステキですね！

チャレンジしてみて、ダメだったらまた営業に戻る！そんな気持ちでラジオパーソナリティの専門学校に通

い、出版社を辞め、アルバイトをしながらオーディションに落ちまくる日々。もう無理かも…と弱気になる日もありましたが、岩手県のラジオ局とご縁があり、今はエフエム岩手でアナウンサー職に就き10年目になります。ずっとリスナーとしてラジオには触れていましたが、「中の人」になると、これまでとは別の気付きがありました。「声と音」だからこそ伝えられること、スイッチを入れるといつものパーソナリティがそこに居るという圧倒的な安心感。そうか、リスナーの頃はコレに惹きつけられていたんだ！とわかったのです(コロナ禍なので尚更)。

小さい頃から憧れていたラジオの仕事に就いて大変なことも多いですが、マイクの前に居る時間は本当に楽しくて幸せです。10年経っても学ぶことばかりで。きつと声が出る限りはこの仕事を続けていくんだらうな、と思っています。

—小さい頃からの夢は天職だったのですね。パーソナリティというお仕事への愛情がヒシヒシと伝わってきます。

それでは最後に、OGとして感じる共立の魅力を後輩に向けてメッセージをいただけますか。

「共立は『共に立つ女性』を育てる大学だ」と、入学してすぐのタイミングで何かの授業で聞きました。時代は流れ、ジェンダーについての考え方も変わりましたが、私が通っていた頃と変わらず、共立はきっと「生き活きとして自立したカッコイイ人」を育て続けているのだらうと思います。大学生活で得たこと、出会った人は財産です。社会に出て無駄になったことは一つもありません！どうか伸び伸びと、そして生き活きと進んでほしいです。

—貴重なお話をありがとうございました。

聞き手 高橋京子(1989卒)



連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々 ②〇—

今回は第20期生の中澤百合子さんに書いていただきました。

ESSの思い出

「学生時代」という言葉に、真っ先に思い出されるのはサークル活動です。

私が所属していたのは英会話のサークル「ESS」ですが、活動の中でも特に忘れられないのは共立祭と合宿です。

共立祭では毎年、日本語禁止で英語しか話せない英会話喫茶をオープンしました。大学の近くの北の丸公園で落ち葉を拾って来て床に敷き詰め、秋のムード満載にし、私達ESS部員はウエイトレスとして飲み物をサーブしたり、各テーブルでお客様の英会話の相手をしたりしました。

英会話喫茶でお迎えしたお客様の中で忘れられないのは、英語を話してみたいと入って来る中学生・高校生達です。彼らが一生懸命英語を話そうとしている姿に、会話の相手をしながら心の中で「がんばれ!」と思ったものでした。

合宿については日中の活動のことはあまり覚えておらず、夜遅くまでいろいろな話をしたりゲームで遊んだりしたことがとても楽しく思い出されます。

大学4年生になりサークル活動は卒業したけれど、合宿には参加しました。この年の合宿の夜は、なぜか肝試し大会が始まりました。確か内容は長い廊下の先の離れの部屋に置いてあるメモを持って帰ってくる

というものでした。私達4年生はお化粧役。口紅やアイシャドーを顔に塗り、お化粧メイクをして離れの部屋や廊下で待ち構え、一人ずつ歩いて来る後輩を脅かしたものでした。

肝試し大会に快く離れや廊下を使わせてくださった宿泊先のホテルの皆様、その節は本当にありがとうございました。

あの時一緒にお化粧役をした同期のメンバーとは、現在、LINEで繋がっています。LINEを通してではあるけれど、誰一人欠けることなく、メンバー全員と学生時代と同様に楽しいおしゃべりが出来ることがとても嬉しい。

中澤百合子 (1976 卒)

私流ズームの楽しみ方

コロナ禍で大好きな旅行に行かれず私が見つけたのは、オンライン旅行。国内外問わず旅行会社がオンライン旅行を募集しているので、一社を選んで出かけてみた。時差を考え、負担のかからない時間帯を選んだ。最初は訪れたことのあるフィンランドで、ワクワクしながらPCに向かった。

懐かしい教会や街並みが映し出された。気温や時間だけでなく、「コロナはどのような状況ですか?」などチャットで質問すると、画面の中から流暢な日本語でガイドが答えてくれる。また、町を歩きながら名所の説明をしてくれる。なんと楽しいことか。

ヨーロッパ諸国やアメリカはもちろん、高山病になるため行かないマチュピチュやナスカの地上絵を見たり、モンゴルの遊牧民やラップランドのサーミ人の生

活も学べた。特にケニアの有名なガイドと野生の動物を見に行った時の興奮は忘れられない。先日は、6か国クリスマスマーケットに申し込んだ。その綺麗なこと。また大晦日から元旦に、各国の「初日の出」を24時間かけて(休憩を含めて)回った。すっかり寝不足に。

体験や買い物のコースもある。石垣島では、事前に送られてくる材料でハーブボールを作った。フィンランドの買い物ツアーでは、ムーミングッズやチョコレートなどを送ってもらった。おすすめはシナモンロール。

今はオミクロン株が急激に増えてきている。また外出しにくくなったが、私はオンライン旅行で楽しく暮らしている。落ち着いたら実際に行ってみようと思う。

大友佳代子 (1974 卒)

広場

予告

伊藤和子さん(1977卒)の個展が2022年5月18日から24日まで、小田急百貨店新宿本店にて開催されます。

掲示板

INFORMATION

2022年度の活動について

新型コロナウイルスCovid19はオミクロン株に変異してまだ感染が続いています。2022年度の総会およびサロン講座開催等につきましては、予定が決まり次第皆様にお知らせいたします。

お詫びと訂正

「通信」第33号第2面「著書紹介」において『秋元松代のフォークロアの世界—「異界」との交流—』(増補版)の出版年を2018年と書きましたが、正しくは2019年でした。また、第4面「私の学生時代」において島田紅良先生のお名前は「こうら」ではなく「あから」と読み、命名されたのは、斎藤茂吉ではなく、与謝野晶子でした。お詫びして訂正致します。(編集部)

編集後記

EDITOR'S NOTE

オミクロン株が猛威を振るって在宅を余儀なくされている中、zoomでしか役員会、編集委員会を開けず、もどかしく思います。そんな中、「通信」を発行することができたのは、嬉しい限りです。

会員のみなさまからのご感想等をいただければ幸いです。(O)